

『名目抄』所載の漢語に差された声点について

——漢語アクセント史構築のために——

上野和昭

一 はじめに

『名目抄』は、朝廷の有職故実に関わる六百ほどの項目を十篇に分けて掲げ、その傍らに片仮名の読みを添えたもので、連声や濁濁その他、いわゆる「名目（読みくせ）」を明らかにした書として広く知られている。それにもかかわらず著者洞院美熙（一四〇九）の自筆正本には、片仮名に濁点がなく、またアクセントをあらわす声点も差されていない。同書の序文には「或いは連声の相呼する有り、或いは五音の相通する有り。故に韻声に当らずと雖も意味尤も深し」（原文は変体漢文、以下同様）として、『切韻』などの韻書のとおりに発音することを「肝心之理」とするようでは「道の術計を知らず」と論断し、「抑も声に依りて其の篇目はなはだもつて抵悟す。能く習ひ得てもつて常に口誦すべし」と記されている。ここに言うところの「声」がアクセントをさすとすれば、同書の原本に声点が差されていないのはまことに遺憾なこととて、著者にはアクセントをいずれば注記するつもりであったの

が、未だこれを成し遂げないまま世に伝わったものと考えられる。

しかし、同書が転写される過程においては後人によって多くの声点に加えられ、いま伝えられているものには、「濁声点を漢字に施すもの（第二群）」と「声点・濁声点を、字音の場合は漢字に、和訓の場合は傍訓に施すもの（第三群）」と、二種の声点本のあることが、早く根上剛士氏によって明らかにされている。序文にはまた、これらの語にさまざまな口伝のあることを述べ、「よく学び深く思へば一義無きにあらず」として「悉曇の理」をあげて説明するところがある。そこには「芻蕘の謳哥を成すは未だ必ずしも宮商を弁へずと雖も皆自からに音律を備へる所有るが如し」と読まれるべき一文があつて、著者が音調に無頓着でなかつたことは明らかであり、後人によって補完され、声点が施されるようになるのも、この書の性格上きわめて自然のことであつたと思われる。

声点が、いつの時点で、だれによって差されはじめたのかは必

ずしも明らかでないが、根上氏のいわゆる「第二群」本の声点は、中院通秀が勝南院法印守誓に依頼して原本を書写したものに由来するらしく、そうであれば原本の成立後まもない十五世紀後半には差声されていた可能性が高い。また「第三群」本の声点は、後水尾院にさかのぼるとする説が有力であるが、その差声方式が不ぞろいで一定しないところなどから、なお検討の余地を残すようにも思われる。⁽³⁾

「第三群」本は所収語彙のほとんどすべてに差声するものであって、とくにそのうちの和語に施された声点については、早くからアクセント史の資料として利用されてきた。金田一彦彦氏は、これを『補忘記』に記された節博士のあらわすアクセントと同じ時代のものとして位置づけ、室町期から江戸初期の中央語の様相を伝えるものとしている。⁽⁴⁾

これに対して漢語に施された声点については、長い間あまり論じられることもなく過ぎてきた。わずかに『日本語アクセント史総合資料 索引篇』(一九九七、東京堂出版)に本書所載の漢語アクセントも採録されているが、これとして「同 研究篇」(一九九八)の「アクセント表示解説」に「新式声点」として解説されたのは和語に差された声点に限られるのであって、漢語についてはこれまで詳しく検討されてこなかったのである。

ところが徐々に漢語アクセントの史的的研究が進み、とくに字音声調と漢語アクセントとの関係が明らかにされる過程で、その史的变化にいくつかの類型が提示されるようになった。⁽⁵⁾ また江戸期の京都アクセントを伝える平曲譜本などの資料も利用しやすく

なって、そこに反映した漢語アクセントとの比較が可能になった現在、ようやくにして『名目抄』所載の漢語についても、そのアクセントを検討する環境が整ってきたように思われる。

ただし、ここに注意すべきは、『名目抄』所載語に声点の差された時期が、室町期から江戸期にかけての、アクセント史にいわゆる「体系変化」の後であったということである。すなわち、平安鎌倉期の京都を中心とする地域においては、語頭から二拍以上低拍が続いても許容されたのであるが、南北朝期以後は、そのような場合に語頭が高く発音されるようになって、たとえば○○型の語は●●型に、○○●型の語は●○○型に変化したのである(以下、高拍を●で、低拍を○であらわす)。このような変化は、その当時の京都語に一律に進行したので、たとえ漢語といえども、日本語のなかに取り込まれて、公家社会の日常に使用されるかぎりには、この変化をまぬかれなかったものと考えられる。したがって変化後百年ほどを経過した時代に生活する宮廷関係者が、人に尋ねることはあつたにしても、自らの聞き覚えたアクセントを注記したとすれば、自ずとこれに影響されるはずであろう。

しかしまた翻って、声点を差す際に、前代の資料を参照した可能性もなしとしない。それをそのままに移声したとすれば、それはもはや室町期のアクセント資料とすべきではなく、むしろ前代のアクセントを反映しているとみるべきであろう。

さらにはまた、所載語が有職故実に偏ることにも注意しなければならぬ。これらは特殊語彙であるから、現代の日常語彙にながるものでないことは勿論である。しかしわれわれの知るアク

セント史の資料には、宮廷社会、あるいはその周辺で作成されたものが多く、ときにその語彙を共有する場合がある。実際、前代の古辞書などに残された声点には、この類の漢語に差されたものが少なからずあるし、後の『平家正節』にもそれらの語彙を拾うことができ、そこに付された譜記には本書に差された声点の標示するものと関係の深いアクセントが反映している。これらの資料と比較検討することで、『名目抄』の声点が、どのようなアクセントを、どのようにあらわしているかという問題について検討する。

二 考察の対象と方法

ここに対象とするのは、『名目抄』声点本のうち「第三群」とされるものの一つ、内閣文庫蔵(146-567)の、いわゆる尊海識語本(新校群書類従の底本)である。

この書において漢語アクセントをあらわしているのは、もちろん漢字一字一字に差された声点である。そのような声点の差されている項目は四百以上にのぼるが、ここでは、そこから抜き出した、漢字一字または二字から成る四拍以下の漢語を見渡すことにする。その数は合計三四八語であり、その構造と拍数によって分類すれば左のようである。ただしこれらの中には連語の後部に位置して低平化したものや、助詞「の」を介して次の語につき高平化したものもあるが、ひとまずそれらを含めてすべて数えあげてみた。

『名目抄』(尊海識語本) 所載の声点付き漢語数

漢字一字一拍の漢語	九語
漢字一字二拍の漢語	一四語
漢字二字二拍(一拍+一拍)の漢語	一五語
漢字二字三拍(一拍+二拍)の漢語	五七語
漢字二字三拍(二拍+一拍)の漢語	八二語
漢字二字四拍(二拍+二拍)の漢語	一七一語
合計	三四八語

さて本稿では、『名目抄』所載の漢語に差された声点は、それぞれの漢語を構成する漢字一字一字の声調ではなく、その漢語としてのアクセントをあらわそうとしたもの」と仮定して考察する。また漢語アクセントは、単字声調の組み合わせによって得られる音調をもとに形成され、アクセント型の変化や多数型への類推を被りながら、日本語のなかに定着してきたものと考ええる。そう考えるかぎりは、室町江戸期の漢語アクセントの「原型」を字音声調とその組み合わせに求めることは、究明の手続きとして認められてよいことであろう。

もちろん、漢字そのものの字音声調(調類)と、『名目抄』に差された声点(の位置)とは区別して考察しなければならない。前者はそれぞれの漢語アクセントの「原型」をさぐる手掛かりであり、後者は求める漢語アクセントを直接あらわしたものである。

ここでは、漢字そのものの字音声調を、漢音の場合は「一」に、呉音の場合は「二」に括って記すこととする。漢語によつては漢音と呉音を交えることがあるから、その場合は、たとえば「一人

イチジン」(人体篇)ならば「入平重」などと前後の括弧を替えて示す。漢音が呉音かの決定は、その漢字の音形による。漢音の声調は、韻書『広韻』『韻鏡』に求めるが、日本漢音の実状に配慮して佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 資料篇』(二〇〇九、汲古書院)所載の「分紐分韻表」を参照する。呉音は、「呉音系字音資料」の記述にしたがう。漢呉同音形のときは決めにくい、同じ漢語を構成する前後の漢字がある場合は、しばらくそれと同じ字音体系によるものとする。

字音声調の調類と実際の音調との関係は、呉音の場合、平声が低平調、去声が上昇調、入声が低平調であったといわれる。漢音の場合も、古くは左に掲げるような調値であったと推定されている⁽¹⁰⁾。したがって、平安鎌倉期の漢語アクセントは、まずは、それぞれの声調に対応する、これらの音調の組み合わせから考えはじめることになる。

漢音声調の調類と音調との関係

平声重(低平調)

平声軽(下降調)

上声(高平調(ただし上声全濁字は上昇調))

去声(上昇調)

入声重(低平調)

入声軽(高平調)

ところが、これらの字音声調は、中国語音とくに指向するような場合とはかく、日本語のなかに漢語として定着すれば、たとえば二拍『平』の場合、室町期以降は○○型を保ちえず、和語と同様に●○型に転じたものと思われる。したがって『名目抄』のような室町期から江戸期にかけて差声されたと考えられる文献

では、『平』とあるからといって必ずしも低平調をあらわそうとしたとは言えない。さらには、字音声調の組み合わせによって、たとえば漢字二字四拍の漢語に○○●●のような音調が想定されるとしても、室町江戸期には、アクセント変化の規則どおりに●○○型になっていることを考えなければならぬし、場合によっては字音声調にもとづくアクセントが、それぞれに変化して、前部の○○が●○○型となり、ふたたび接合して●○○○となることも考えなければならない⁽¹¹⁾。またこのころ一拍去声字はすでに上声化して高平調になっており、二拍におよんではじめて●○として安定することが言われている。したがって、以下の考察においては、声点によるアクセント標示の体系性を勘案しながら、声調の組み合わせと音調との関係を個別に考えたいと思う。

また漢語アクセントが形成される過程に「中低形の回避」ということが言われる。「中低形」とは、たとえば●○○のように高い部分が二箇所に分かれている音調をさすが、これは一語としてのまとまりをはばむ音調であることから、●●●型や●○○型に調整される。これが「中低形の回避」ということである。たとえば漢字二字三拍(一拍+二拍)の漢語が「上去」のような声調の組み合わせであるときには、このようなことが想定されなければならない⁽¹²⁾。

一方また『名目抄』(尊海識語本)に差された声点は、へ(清濁を捨象する場合はへ)に括弧であらわす。《平》は、同書において漢字の左下に付された朱星点のことであり、《上》《去》もそれぞれ左上、右上に付されたものをさす。しかし、《入》すなわち右

下の点はただ「女王祿(去入) ワウロク 不読女字例也」(恒例諸公事篇、片仮名傍調はそれぞれ項目の下に記す。以下同様)の「祿」に差されるだけである。ほかは、たとえ入声字であっても、すべて《平》《上》《去》いずれかの声点が施されている。このことだけからも、本書の声点が、字音声調をそのまま反映するものではないことは明らかである。

そのように、それぞれの漢字に差された声点は、その字音声調と必ず一致するというものではない。それは漢字一字一字が漢語を構成することによって、それぞれの字音声調とは必ずしも一致しない音調になるからである。そして、わずかに《平》《上》《去》三種の声点とその組み合わせによって、それをあらわそうとしているのである。

ただし、《平》《上》《去》三種の声点しか見られないことをもって、たとえば漢音の軽重が区別されていないということが言われるとすれば、それには説明が必要であろう。この文献は、《平》《上》《去》三種の声点をもって漢語のアクセントを明示しようとしているのであって、字音声調を直接あらわそうとしたものでも、ましてその軽重を差し分けようとしたものでもない。《平》は左下の星点であるが、そしてそれはその位置によって漢音の低平調と下降調の違いを区別していかないものであるが、それもそのはずで、この文献の場合、《平》は必ずしも字音声調の平声と対応しているものではないからである。

しかし、漢語アクセントに、字音声調が反映しているかどうかは自ずと別の問題であろう。声点はたしかに字音声調と対応して

いないが、それらによってあらわされる漢語アクセントには、字音声調が反映してゐてなら不思議はないのであって、●●の音が平声軽に、●●の音調が入声軽に由来するという可能性は、考察の出発点において想定しておかなければならないことである。

このようにして、字音声調またはその組み合わせと、『名目抄』にあらわれる声点との対応を検討し、そこに傾向を見出だそうとする一方で、よりどころとして認定した字音声調そのものが、検討の出発点におくには不適當な場合もないわけではない。

令旨(上上濁)リヤウシ 春宮四宮女院等仰也 又親王等之

所命同坎 先規可勘

たとえば「諸公事言説篇」に右のように差声される「令旨」は、その音形から『去去』の組み合わせによって形成されたアクセントが、『名目抄』の声点に反映しているものと見込まれる。しかし、『去去』から想定される漢語アクセントは●●型であって、本書の《上上》というアクセント標示と一致するとは言いにくい。ところが、『色葉(字類抄)』(前(田本)上、七四ウ六 前田育徳会編刊、勉誠社複製本による)には「令旨(上上濁)」とあって、これならば本書の声点のあらわすところと一致しているようである。このような場合は、字音声調の組み合わせを採らず、『色葉』の声点の方をもとに考察することにする。また、このような検討において、さらに『平家』正節の譜記から知られるアクセント(上野和昭編『平家正節声譜付語彙索引』アクセント史資料研究会による)との対応がよければ、なおのこと『名目抄』の声点によってあらわ

された漢語アクセントに信頼がおけることになろう。

三 一拍・二拍の漢語に差された声点とアクセントとの関係

右のような考え方にたつて、声点と字音声調との関係を考察する。本稿では、紙幅の都合から、とくに三拍の漢語を中心に検討するが、その前に一拍・二拍のものについても簡単に記しておくたい。

漢字一字一拍の漢語には《平》《上》《去》三種の声点の施されたものがある。《平》の声点の付けられたものには「座ザ」¹⁵⁾、「儒ジュ」〔平重〕があり、《上》の付けられたものには「靴クワ」〔去〕、「昨ソ」〔去〕と「妃ヒ」〔平軽〕がある。「妃」のアクセントは《平》によるものかもしれないが、「平軽」とみた方が高起性を説明しやすい。《去》の声点の差されたのは、次の一例があるだけである。

牙笏〔去濁平〕ケノシヤク〔〇平〇〇〕 衣服篇

これを総合してみると、《平》の差された語は一拍名詞第三類相当で、室町江戸期には語単独で、伸ばし加減に●型（以下、●は上昇拍を、●は下降拍をあらわす、従属式助詞〔が、に、を〕などを付ければ○であったであろう。『正節』（東大本）に「座に（×コ）」〔上慈心二一―二口説〕とあって、これを支持する。また《上》の差された語は第一類相当で●型であろう。「妃」〔平軽〕を含むから第二類相当の●型をもあらわした可能性はある。

漢字一字二拍の漢語にも《平》《上》《去》三種の声点が差され

ている。《平》の差されたのは「奏ソウ」〔平〕、「嬪ヒン」〔平重〕、「揖イフ」〔入〕であり、《上》は「標ヘウ」〔上〕、「爵シヤク」〔入軽〕で、《去》は「香カウ」〔去〕、「慶ケイ」〔去〕である。

このことから考えるに《平》は二拍名詞第二・三類相当の●○型を、《上》は同じく第一類相当の●●型を、《去》は第四類相当の○●型をあらわしたものと思われる。第五類相当のものはない。『正節』に「奏せさせ給へば（上×上××）」（八上法印二―一口説）とあるところからしても、「奏」に施された《平》は●○型をあらわしたものと解釈する。しかし、これが前代の資料からの移声とすれば、《平》の差された漢字は《平》〔平重〕〔入〕のような古く低平調のものばかりであるから、かつての○●型をあらわしたという可能性をまったく否定することはできない。

漢字二字二拍の漢語には《平平》《上平》《上上》《去上》《去平》の五種類の声点が施されている。このうち《上平》は「座主ザス」〔平平〕、「留守ルス」〔去平〕、「舞妓ブキ」〔上上全濁〕などを含むので、●○型をあらわすとみるのがよいであろう。「舞妓」はそのまま単字声調を連ねれば●●が調整されて●●型になるが、むしろ《上平》とみた方がよかつたかもしれない。《上上》は「楚々ソソ」〔課試クワシ〕がそれぞれ《去去》〔去去〕であるから●●型であるとすれば対応がよい。《去上》の声点が差されるのは「亀書キシヨ」〔平去〕であるから○●型であろう。和語に差された例と同じく《去》の差された拍は、それ自体は低く、次の拍の高いことをあらわしている。

残る《平平》は「御座ゴザ」「平平」、「度者ドシヤ」「平平」など、古く低平型に対応するものばかりに施されている。しかし、『正節』に「御座(ゴ×)(十二上御座一九四口説)などあつて、これらの《平平》は●○型をあらわす可能性が高い。また《上平》の付けられた「座主ザス」「平平」には、『正節』に「座主に(上××)(炎上内裏二一口説)のような例があるが、『平平』が古い○○型をあらわしていないという確実な証拠は、ここまでのところ明らかでない。

四 三拍の漢語に差された声点とアクセントとの関係

漢字二字三拍の漢語は、その構造によって「一拍十二拍」と「二拍十一拍」とに分ける。そしてまず、「一拍十二拍」の漢語(五七語)について検討する。

【表1】では、そのような漢語を構成する漢字それぞれの声調の組み合わせから得られる音調を、大きくA(低平調)、B(下降調)、C(高平調)、D(上昇調)、E(起伏調)、F(不明)の六種に分類し、さらにBをB1●●○とB2●○と(表ではHHとHLと表示)に分けた。DもまたD1○○●●とD2○○●●と(同じくHHと□□と表示)に分けたが、D2は○○●●○○○の変化が想定されるので、B2の隣にその位置を移動してある。※は一語に二種の差声がある場合で、それぞれに数えたことをあらわす(右下総計の数字はそれらを一語に数えたもの)。*印のあとの数字は、助詞「の」接続形のあらわれる語数(外数)である。

左端の一列は、声点がそれぞれの漢語にどう差されているかを

整理したもので、《平平》《上平》《上上》《去上》《去去》《去平》の六種類が認められるが、そのうちの《去去》には一例、《去平》には二例が数えられるばかりである。《去去》の声点が認められるのは「誦経ジュギヤウ」「平去」ただ一例であるから、これによってどのようなアクセントをあらわそうとしたのかについては判断をひかえる。それに対して《去平》の二例は「絲鞋シカイ」「平軽平重」と「母后ボコウ」「上去」であり、いずれもこれらの声調の組み合わせからは《去平》に予想される低起式のアクセントを想定できない。ところが「色葉」(前下、七四〇三)に「シカイ(平上平)」と声点があり、これは○○●○というアクセントをあらわしたものである。本書の《去平》もこれをあらわそうとしたのではなからうか。「母后」については、『正節』に字音声調の組み合わせから理解しやすい●○○○型とみられる例(十二下横田八一二白声など)がある。

つぎに《去上》は○○●●型をあらわそうとしたものであろう。D1の「御幸ゴカウ」「平上」、「御産ゴサン」「平上」は漢音を交えて読むことになるが、この組み合わせを反映したものともみてよいであろう。D2の「御禊ゴケイ」「平去」、「御前ゴゼン」「平去」は前部要素の「御」が接頭語であることから結合が緩く、型どおりに○○●●○○○の変化をしなかつた模様である。すでに「色葉」(前下、一〇ウ三)に「御禊(平上)」とある。『正節』は●●○型(炎上清水一五十五白声)を反映しているので、この場合参考にはならない。しかし「御前」については「近松浄瑠璃譜本」

(坂本清恵編『近松世話物浄瑠璃胡麻草付語彙索引体言篇』アクセント史

【表1】 漢字二字3拍（1拍+2拍）の漢語

	A LLL	B1 HHL	B2 HLL	D2 LLH	C HHH	D1 LHH	E LHL	F	計
《平平》	3*2	*1	3	6	2※			2	16*3
《上平》	3	1	4	6	3*1※			1	18*1
《上上》			1	2	2			*3	5*3
《去上》	*1			2		2		4	8*1
《去去》				1					1
《去平》	1				1				2
計	7*3	1*1	8	17	8*1	2	0	7*3	50*8

【表2】 漢字二字3拍（2拍+1拍）の漢語

	A LLL	B1 HHL	B2 HLL	D2 LLH	C HHH	D1 LHH	E LHL	F	計
《平平》	5			4			2	4	15
《上平》	12	1		1	3	2	3	1	23
《上上》	3*1	1		*1	2	5	2*1	3	16*3
《去上》	*1				1				1*1
《去去》				1※*1	*1	2*1	1	3	7*3
《去平》				4※	1	4	4*1		13*1
計	20*2	2	0	10*2	7*1	13*1	12*2	11	75*8

【表1・2】の上段A～Eは、字音声調の組み合わせから推定される漢語アクセントの「原型」。

Fは、字音声調が不明のために「原型」を推定できないもの。

「中低形」はすべてHHH型に調整されたものとする。

なお、Hは高拍、Lは低拍をあらわす。

資料研究会)『正節』などが○●●型(またはその変化した○○●型)を反映している。Fにしたものの中にも「几帳 キチャウ」は「(類聚) 名義(抄)』(観(智院本)法中五四オ一 天理図書館善本叢書)に「キチャフ(平上上上)とあり、「蘇芳 スハウ」にも「色葉』(前下、一四オ二)に(平上)の声点が見られる。

《上上》について、Cの二例「輔代フダイ」(上去)、「史生 シシャウ」(上去)は高平調にアクセントが調整されたのであろう。D2は型どおりに変化すれば●○○型になるところであるが、その中には「受禪 ジュゼン」『平去』のように『正節』に「受禪(上上上)』(三上額打三一二口説)と●●●型にあらわれるものもある。

ここに問題となるのは、《平平》と《上平》とがいかなるアクセントをあらわそうとしたかである。前節の漢字二字二拍の漢語の検討においては、《平平》が古く○○型をあらわしたものの移声なのか、それが変化してできた●○○型を意図して差声されたものなのか決定できなかった。しかし、ここにおいて《平平》は少なくとも○○○型を移声したものではないと言えそうである。なぜなら字音声調の組み合わせから、もと低平調であったものばかりに《平平》と差声されているのではないことが明らかになったからである。B2とD2の九語がそれで、これらは●○○型とみられる。た

たとえばB2の「流罪ルザイ」〔去平〕は『色葉』(前上、七九ウ三)に〈去平濁〉の声点があり、『正節』(十二下座流五二―四口説など)にも●○○型に対応する譜記がある。Cとした二語「嫁娶カシユウ」〔去去〕、「無文ムモン」〔去去〕も高平型に調整されなかつた可能性が高く、すでに『色葉』(前上、セウ二)に〈去平〉と声点があるし、『無文』は『正節』(一上無文二―四口説など)に●○○型に対応する譜記がある。さらにAとしたもののなかにも、たとえば「後院ゴギン」〔平平〕のように、『正節』(四下吉田五―三素声)に●○○型の譜記をともなつてあらわれるものがある。

これらを総合的にながめれば、『平平』は古いものを移声したのではなく、むしろ積極的に室町江戸期の●○○型をあらわそうとしたものであることは明らかであろう。

しかし、その一方で『上平』と差されたものも、その字音声調の組み合わせは、ほとんど『平平』と差された諸語に変わらない。Aのなかには「二品ニホン」〔平平〕のように、『正節』に●○○型に対応する譜記であられるものもある(十五上内女九―二口説など)。

これをもつてみると、「二拍十二拍」の漢語の場合は、『平平』も『上平』も、ともに●○○型のアクセントをあらわそうとしたと考えてよさそうである。

すつとこの構造の漢語では『平平』『上平』が●○○型を、『上上』が●●●型を、『去上』が○●●型を、そして『去平』がおそらくは○○●●型をあらわそうとした、ということになる。そうなる●●●○○型にあたるものがないことに気づく。字音声調の組

み合わせから、A類のほかに、この型になりそうなのは「擬階ギカイ」と「五音ゴイン」で、ともに「上平軽」であろうが、前者には『平平』の、後者には『上平』の声点が差されている。またAの「四品シホン」〔平平〕には『正節』(一上嚴還五―五口説など)に●●○○型と対応する譜記があるが、『名目抄』には『上平』と声点が差されている。●●○○型については、『平平』『上平』のいづれであらわそうとしたか明らかでない。

つぎに「二拍十一拍」の漢語(八二語)について検討する。分析の結果は「表2」にまとめられている。要点のみを記せば以下のようになる。

『上上』のうち「日記ニツキ」は、助詞「の」接続形であられる。本稿の方針からすれば『入平』を想定すべきであろうが、あるいは『入去』かもしれない、そのうえ舌内入声音が一拍とされなかつただろうから、これはむしろ二拍語とみるのがよいであろう。残る「勅旨」(「入軽上」)からは●●●型が想定されるが、それならば『上上』の差声はふさわしくない。「日記」に差されているところからすれば、○●●型をあらわそうとしたか。

『去上』と『去平』はそれぞれ○○●●型と○○●●型をあらわそうとしたものとみる。『去平』にEが多く、D2には入声字を含むものがあり、「兀子ゴツシ」〔入上〕、「雑訴ザツソ」〔入去〕は二拍相当であろうから除外して考える。問題は去声字の重なるD1で、型どおりにアクセントが形成されれば○●●●型となる。「半臂ハンビ」〔去去〕はその典型であつて、『名義』(親仏中六四オ二)に「ハンヒ〈上上上〉」とあり、『色葉』(前上、二六オ四)に〈去

上濁)とあるのが『名目抄』につながる。一方また字音声調の同じ組み合わせで《去平》と差されたものには、たとえば「殿下テンガ」(去去)があるが、これは「正節」(六下殿下二〇―二素声など)でも〇●〇型であらわれ、まったく謂われのないものではない。

また《上上》が●●型をあらわしたことも動かないところであろう。やはりD1に語がまとまっているのが不審であるが、たとえば「讓位ジャウキ」(去去)、「令旨リヤウジ」(去去)には「正節」に●●型と対応する譜記がある(五下厳幸九―三口説、捕物源氏二五―五白声)。

残る《平平》と《上平》はやはり難解である。Aの類は両方のアクセント標示がなされるが、《上平》の差声のある「長者チャウジャ」《平平》に『正節』(二下海道九―一口説など)が●●〇型に対応する譜記を付けることからしても、《上平》は●●〇型をあらわそうとしたと考えてよいであろう。D1の「宣旨センジ」《去去》、Fの「僉義センギ」《平平》(「宣」の呉音声調不明)には、『色葉』に「宣旨《平平》」(前下、一〇ウ四、「僉議《平平》」(前下、一〇ウ六)とあることからすれば、本稿での字音声調の認定に問題があつたようである。これらともに『正節』(十上臣流九―三口説、七下重斬二五―四口説など)には●●〇型に対応する譜記をもたつてあらわれる。

これに対して《平平》は《上平》と共通するA類を除けばD2類に特徴があり、それらが室町江戸期に●〇〇型であつたことは、たとえば「瓶子ヘイジ」(平重上)の『正節』譜から明らかであ

る。

瓶イ子(上×××) 十上鹿谷二六一四白声

また、E類の「床子シャウジ」《去平》に『色葉』「床子(前下、七四ウ六)とあることからすれば、これらはむしろD2類に含めてよかつたのかもしれない。

以上を要すれば、漢字二字三拍(二拍+一拍)の漢語に差された声点は、《平平》が●〇〇型を、《上平》が●●〇型を、《上上》が●●●型を、《去上》が〇●●型を、そして《去平》が〇●〇型をあらわそうとしたものと解されるのであつて、想定されるアクセント型をすべて覆っている。

なお「還昇クワンジヨ」に〈去上濁〉(私儀篇)と〈去平濁〉(諸公事言説篇)と両様の声点があつて、同じ語が異なる篇目に異なるアクセント標示であらわれることには注意しなければならぬ。序文にいう「声に依りて其の篇目はなほだもつて牴牾す」の一例であるとすれば、この二種のアクセントの使い分けがあつたのかもしれないが、いまのところその詳細は不明である。

五 おわりに

三拍の漢語を中心に、そこに施された声点によるアクセント標示を問題としてきた。四拍語(二七一語)については詳細を別稿にゆずるが、《平平》は●〇〇〇型が有力であり、《上平》は●●〇〇型か。《上上》は●●●●型、《去上》は〇●●●型、《去平》

●〇〇〇型をあらわそうとしたものと考えられる。全体をとおしてみると、『名目抄』における《平》または《平平》

は、一拍のとき以外、すべて下降調をあらわそうとしたものであることが明らかである。ここにも「新式声点」の性格がよくうかがえるのであり、そのような方式で差声された声点のあることを、今後の漢語アクセント史研究では考慮しなければならないであろう。

ただA類とした、低平調を「原型」とする漢語に『平平』《上平》が同じようにあらわれることについては、さらに検討しなければならない。またここでは紙幅の関係から、三拍語についても、その全例を提示できなかったが、それに加えて和語に差された声点との関係など、述べたりないことが多々ある。

かつて筆者は『名目抄』の和語に差された声点を考察して「『名目抄』の声点標示は複層的であり、同じアクセントに異なる標示方式が見られるが、同じ差声が異なるアクセントを同時に表わすということは決してない」(『日本語アクセント史総合資料 研究篇』)と記した。しかし、漢語に差された声点はそう簡単にいかないようである。これについては、稿をあらためて論ずる機会を得たい。

- 注(1) 根上剛士(一九七六)「名目抄声点本考」『国語学』一〇四
- (2) 注(1)に記した根上氏の論文に詳しい。
- (3) 上野和昭(一九九三)「名目抄の声点標示について」『早稲田日本語研究』創刊号
- (4) 金田一春彦(一九五五)「古代アクセントから近代アクセントへ」『国語学』二二一
- (5) たとえば、榎木久薫(二〇〇四)「高山寺藏寛喜元年識語本新訳 華嚴経の複数種声点差声字について」『鳥取大学教育地域科学部紀

要教育・人文科学』五一一、石山裕慈(二〇〇五)「涅槃講式における漢語声調の変化についての考察」『訓点語と訓点資料』一一一五、加藤大鶴(二〇〇九)「尾張国郡司百姓等解文」における二字漢語の声点」『論集』V アクセント史資料研究会などの諸論文。

(6) 馬淵和夫(一九五四)「韻鏡校本と広韻索引」新訂版 巖南堂書店 による。

(7) 『法華経单字』九条本法華経音』『法華経音訓』『法華経音義』や『観智院本類聚名義抄』の和音注など。

(8) ただしこれはあくまでも推定であつて考察の手掛かりにするというのである。古辞書その他の前代の資料に記載があり、それが『名目抄』の声点を理解するうえにより有効である場合、あるいは、後の資料に記載されるところと『名目抄』の声点との対応がよい場合などは、字音声調の認定を改める必要がある。

(9) 沼本克明(一九七六)「呉音の声調体系について」『国語学』一〇七

(10) 金田一春彦(一九五二)「日本四声古義」『国語アクセント論叢』法政大学出版局

(11) このことについては、加藤大鶴「漢語アクセントの伝統性而非伝統性」(アクセント史資料研究会発表資料二〇一一・九)などを参考にした。

(12) 注(9)に掲げた沼本氏の論文に詳しい。

(13) ●●はアクセント型としては認めがたい音調であるから「 \downarrow 型」という術語を用いず、あえて「中低形」とよぶ。

(14) 沼本克明(一九七九)「平安時代に於ける日常漢語のアクセント」『国語国文』四八―六のほか注(5)に記載した諸論文などに指摘がある。去声拍の高平化やいわゆる「中低形の回避」によって高平化する場合、去声の調値は、上昇調であるとはいえ、明確な低起性をもたなかったであろう。その点において、同じく上昇調といわれる、室町期以降の一拍第三類相当の語群に聞かれる音調とは区別されるべきである。同じ去声でも後に二拍になって○●となれば、二拍名

詞第四類相当の語群と同じく低起性をもつことになる。●と○とが接合して○○型になるようなことは、低起性を得てはじめてありうべきことで、古くからあったとは考えられない。

(15) 「座」は「宴ノ座(上平濁)」、「宴穩ノ座(上上平濁)」、「垣下ノ座(上上濁)」(ともに諸公事言説篇)より抽出。連語の後項に立って低平化した可能性もないわけではない。以下の「奏」「御座」も同様であるが、ひとまず単独でも《平》《平平》と差声されたもの

として扱う。

(16) C類には、●●●型へアクセント型が調整されたと思われるものも含めて数えた。

(17) 「三会サンエ」「去平」、「世務セイム」「去平」、「版位ヘンキ」「去平」のほか、「先蹤センジョ」「去平軽」、「万機バンキ」・「去平軽」もここに含めた。

新刊紹介

細川英雄・武 一美編著

『初級からはじまる「活動型クラス」——ことばの学びは学習者がつくる——』『みんなの日本語』を使った教科書・活動型クラスを例に』

本書は早稲田大学日本語教育研究センターで実践されてきた「活動型クラス」を紹介している。「活動型クラス」は、教科

書を用いて、日本語を学習者の外にある知識として学習する伝統的な「教科書クラス」と違って、学習者が日本語で自分のことを語って、相手のことを理解するという活動を通して、相手とつながっているという実感を得る。よって、学習者の言語使用者としての自覚と自信が形成され、日本語の実践力も伸びていくのである。

こういう「活動型クラス」を具体的にどのように初級から行うかという問題について、本書は初級で多く用いられている教科

書『みんなの日本語』を使った「教科書クラス」と並行して行う、「活動型クラス」(教科書・活動型クラス)を例にして提案した。その展開の可能性が十分にあることを期待させる。より効果的なことばの学び方を考え直したくなる一冊である。

(二〇一二年五月 スリーエーネットワーク A5判 八十八頁 税込一二六〇円)

〔屠 潔群〕